

吉本隆明

◆冬の詩人とその詩

著者略歴

宮城 賢（みやぎ けん）

1929年 熊本県に生る。

1951年 東京外語英米科卒業。

著 書 『亡郷歌』（私家版）

『宮城賢詩集』（国文社）

現住所 埼玉県所沢市大字中新井985の682

所沢ニュータウン・スカイマンションA棟1206

吉本隆明——冬の詩人とその詩

深淵叢書

昭和48年11月15日 第1刷発行

昭和49年3月20日 第2刷発行

著 者 宮 城 賢

発行者 前 島 幸 視

印刷所 高 島 印 刷

製本所 並木製本所

発行所 東京都豊島区 国 文 社
南池袋1-17-3

1098-7318-2335

吉本隆明

◆ 冬の詩人とその詩

宮城 賢

国文社

目 次

第Ⅰ部『固有時との対話』

1 〈固有時〉とはなにか

9

2 モチーフとしての劇

28

3 言語と思想

34

4 〈わたし〉の構造

53

5 内部と外部

73

第Ⅱ部『転位のための十篇』

1 〈転位〉の位相——ランボオからマルクスへ

97

97

2 二つの一人称

120

3 〈憎悪〉の構造

152

4 〈私〉の位置

166

第Ⅲ部『転位』以後

215

1 〈罪〉と詩

215

2 〈冬〉の成熟

234

あとがき

251

吉本隆明——冬の詩人とその詩

第Ⅰ部『固有時との対話』

1 〈固有時〉とはなにか

吉本隆明の思想的営為の烈しい持続は、私には、あたかも熄むことなく噴火しつづける活火山の相貌をもって迫る。そうして、この活火山のこれまでの全貌をみるとき、そのエネルギーのおよび方法的源泉として、『固有時との対話』という特異な作品が到るところに底流しているのを私は感じるのである。すなわち、この作品に先行する大量な初期詩篇の時期を潜伏的噴火期とし、この作品に後続する『転位のための十篇』を含む歴大な著作群を擁する現在までの時期を顕在的噴火期とすれば、『固有時との対話』はまさにこの二つのネガとポジの時期を全的に架橋する意義をもつといえと私には映るのである。

それは、俗にいわれる「処女作にすべてがある」という関係とも異なるものである。そのような特異な位置にある作品が必然的に内包しているものもろの相^{アスペクト}について立入る前に、〈固有時〉なる

語をつぶさに検証すべき必要がのびきならぬものとして私には痛感される。私が吉本隆明のかなり熱心な読者になったのは三十歳を過ぎてのことであつたが、初めて『固有時との対話』に接したときの印象はいまも私の胸裡に鮮かに刻印されている。

まず〈固有時〉という独特な時間の表現がいきなり私の眼を奪つたのである。いったい〈固有時〉とはなになのか？ 文学者であると共にすでに科学者でもあるこの作者のことだから、もしや自然科学の用語として〈固有時〉というテクニカル・タームがあるのかもしれないと思ひ、折あるごとに科学・技術の用語集などにも当たってみたが、どうもそれらしいものはないのである。

ままよ、と私は思潮社版『吉本隆明詩集』をとにかくも読んだのである。とにかく読んでみないことには何事もはじまらない。そして、そのある一節に次のような一節を見いだすのであつた。

わたしの知らうとしたことは時計器にはかかはらない時間のむかふからやつてくるはずであつた　しかも視ることの出来ない形態で　決してわたしを露ほすやうにはやつてこないはずであつた

この個所にいたって、私は〈時計器〉という名辞をいたく喜んだ。そのころ、私は、英語のタイムピース (timepiece) という語になじんだばかりで、この包括的な時計器の名称をこよなく愛していたからである。人は、つまらぬというかもしれないが、〈時計器〉は私にはこのへタイムピース

なのである。更に読み進むと、こういう一行もあった。

言ひかへるとわたしは自らの固有時といふものの恒数をあきらかにしたかった

これらの表現は、〈固有時〉について、なにがしかの概念をたしかに私に与えるものではあった。私は、いくたびかこの作品を読みかえした記憶をもっている。にもかかわらず、〈固有時〉という時間の概念を私は決定的に自身において定義することができぬまま、自分の読解力の至らなさを嘆いていた。そして、数年前、勁草書房から『吉本隆明全著作集』が刊行され始めたのである。

〈固有時〉の語義を解せずしては、この作品を読んだことにならないと思っていた私が、これに飛びつかなかったはずはない。なканずく、初期詩篇を収めた二冊は、私の熟読の対象となったことはいうまでもない。この膨大な、そして緻密な初期詩篇群が吉本隆明の読者たちにそれぞれ一方ならぬ衝撃を与えたであろうことは、わが身を振りかえって、想像にかたくない。例えば、その正直で正当な反応の一例がここにある。

へたしかに、旧ユリイカ版『吉本隆明詩集』を原本とする従来の『吉本隆明詩集』しかわたしたちが持ちえなかったとき、この『固有時との対話』は不可解な突出であった。それまで初期詩篇として発表されていた「緑の聖餐」の系列の詩や『抒情の論理』所収の「エリアンの手記と詩」「異神」と比べてみると、『固有時との対話』には隔絶と呼べるほどの飛躍がみられるのである。吉

本隆明の詩のすぐれた理解者たちがへこの詩集は、詩人の発展が、あたかも天啓か靈感を受けたかのように突然変異的におこなわれる、一つの例（鮎川信夫）としたり、へすみずみまで、他に類例を見ぬスタイルと方法に貫かれたひとりの詩人が、突如として、全面的に生まれ出たと思わざるを得ない（粟津則雄）というような評価を与えたことが妥当なものとして受け入れられていたゆえンである。わたし自身もそれを疑う根拠を持たなかったといえる。しかし、『吉本隆明全著作集』の刊行により、初期詩篇、とりわけ「日時計篇」が発表された現在、これらの評価は無効とならざるを得ないだろう。「日時計篇」がわたしたちに示すところによれば、『固有時との対話』は、短い詩篇による、むしろ、同じような試みの執拗な持続によってこそ開けてきたのである。それらは始まりもなく終りもなくといった不分明な意識のうちで濃密な影と影を重ねるようにして書き継がれ、それらがほぼ定稿と呼べる段階で、更にそれらを礎石にしたひとつの巨大な建築ともいふべき『固有時との対話』が目ざされたのである。今となってみれば、わたしたちの驚きは、『固有時との対話』が突然変異的に出現したところにあるのではなく、同一主題が反復して試みられるその執拗な持続、それを高度の抽象まで高める硬質な意志力の上にあると言わなければならないだろう。そこには何の神秘もない。欠如としておかれている表現の主体が、みずからの主格を組織していくために、どれほど至難な持続力を必要としなければならぬかがそこに示されているばかりである。そして、『固有時との対話』が形成されるこの過程があらわにしているもののうちに、作品としての核もまた隠されている。』（学燈社刊『国文学』第16巻9号所収・北川透「吉本隆明の詩——『固有時との対話』」）

話』について」

引用が長くなったが、あの初期詩篇が発表されたときの、これは代表的な受けとめ方であろう。むろん、私にしても、これといかほどの逕庭があるわけでもなかったのである。北川透がほとんど正確に指摘しているように、『固有時との対話』が完成されるまでの過程のなかに、「作品としての核」すなわち〈固有時〉の実体が隠されているであらうことも、この膨大な初期作品群を前にして私が感じたことである。しかし、吉本隆明を論じた多くの文章が、〈固有時〉の実体そのものにふれずにこれを素通りにして論じていることは、私にはまことに異様と思われた。そのほとんど唯一の例外は、磯田光一の『吉本隆明論』であらう。私は、私とほぼ同年代のこの批評家が、〈固有時〉そのものの実体について、いくばくなりとも解明への意志を示したことに共感を禁じえない。磯田説によれば（同書九〇頁）、〈固有時〉とは、〈昭和二三年一〇月五日の制作日付をもつ「かなしきいこひに」〉と題する詩篇の、次のような部分に起源をもつものである。』とし、左の詩句を引用している。

冷たいいこひの日から

わたしはいっぱいの夢をこしらへた

時間は固有にながれ

特異の方向にむいていった

それから運命は萌えてゆくやうだった

そして磯田光一はつづけてこういう、△「固有にながれ」る時間とは、戦後社会のなかにありながらそれに和合できない内面を流れる時間である。その時間のなかには、悲しみが秘められている。』と。

この、初期詩篇のなかの詩句の引用に裏づけられた解明への意志を私は貴重とするものである。まさしく「内面を流れる時間」が△「固有の時」にちがいない。私は、磯田光一のこの指摘に言葉をつけ加えるべき必要をほとんど感じない一方、なお心に漠然とした不満を感じていることも事実なのである。その漠然とした不満を通りすぎて先へ進むことは私の本意でない以上、私はそこから始めねばならぬ。といって、私にかくべつの方法があるわけではない。私は、無慮六百篇を超えるあの初期詩篇を一つずつ丹念に読んできたその読後感から出発するほかはない。

たぶん発表をあてにして書かれたのではないと思われるこれらの詩作品は、質的にもすぐれたものであるだけでなく、吉本隆明の△「詩と真実」をあますところなく私たちに伝えてくれるのである。大冊二巻におよぶ初期作品を読み終えて私に迫ってきたものは、この詩人の△「冬」の貌であった。かねて私の念頭には、『固有時との対話』のエピグラフまたはプロオグともいうべき一節が耳朶に鳴っていた。

メカニカルに組成されたわたしの感覚には湿気を嫌ふ冬の風のしたに適してゐた。そしてわたしの無償な時間の劇は物象の微かな役割に荷はれながら確かに歩みはじめるのである……と信じられた

このエピグラフまたはプロロオグ（以下ではプロロオグとよぶ）における「湿気を嫌ふ冬の風」の〈冬〉が、初期詩篇中にも頻出することと無関係のものであるとは私にはとうてい考えられないのである。ちなみに、前掲のプロロオグにしても、『日時計篇（上）』のなかの〈抽象せられた史劇の序歌〉の最終節を僅かに改筆して嵌めこまれたものである。

いま念のためにいえば、吉本隆明の初期詩篇と私がここでよぶものは、左に掲げる作品集から成るものである。

『呼子と北風』（五篇）

『詩稿Ⅳ』（二四篇）

『かなしきいこひに』（二一篇）

『白日の旅から』（二篇）

『詩稿Ⅹ』（二〇四篇）

『残照篇』（二七篇）

『日時計篇（上）』（二四八篇）